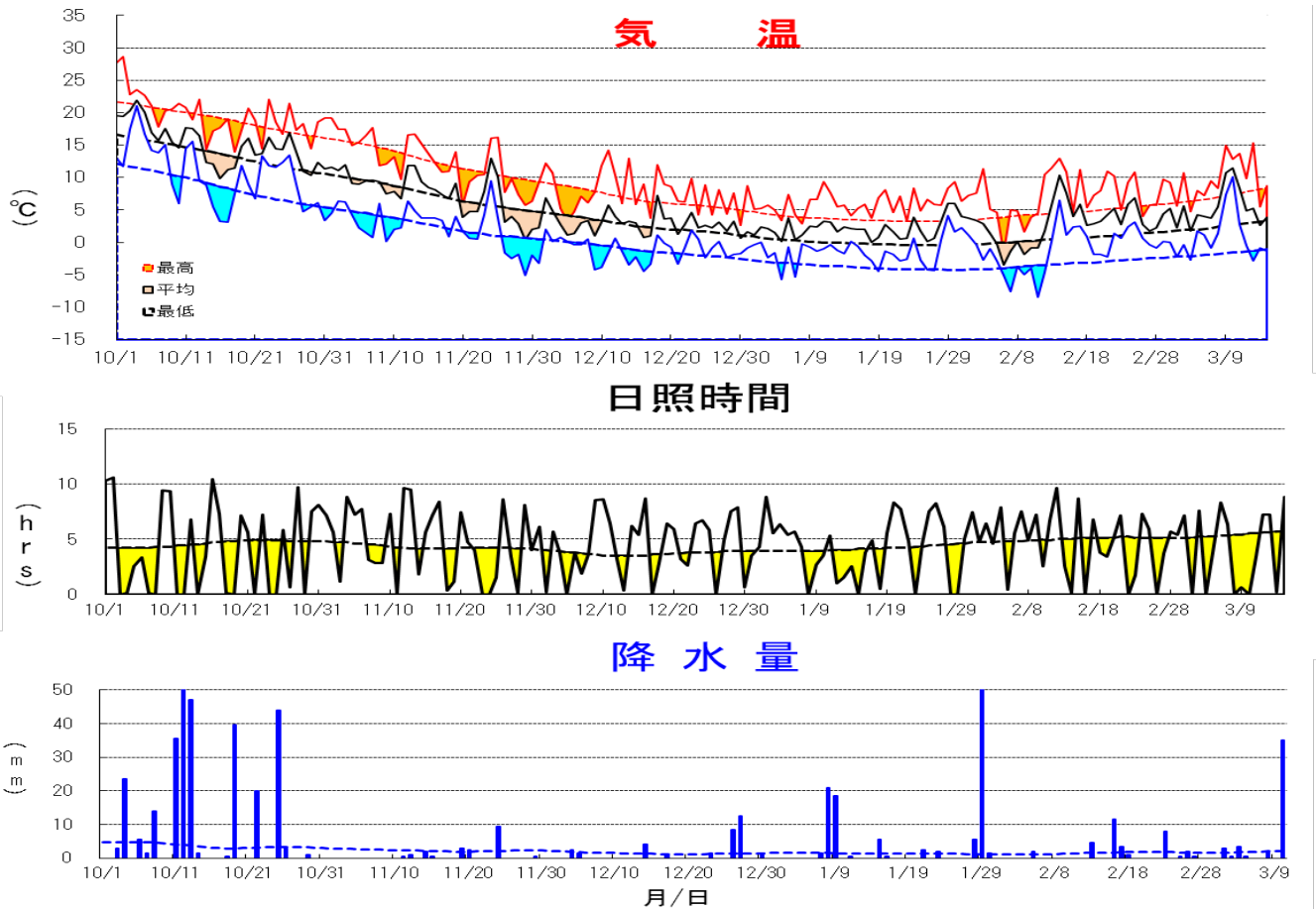


～播種遅れたものの、少雪・暖冬で回復傾向で生育も進む～

1 気象経過 (10月～)



| 月 | 平均気温 (°C) | 最高気温 (°C) | 最低気温 (°C) | 降水量 (mm) | 日照時間 (h) |
|------|--------------|--------------|--------------|-------------|-------------|
| 1月 | 2.1 | 6.0 | -1.4 | 112 | 131 |
| 平年差 | 2.2 | 2.3 | 2.3 | 70 | 3 |
| 前年差 | 2.0 | 2.5 | 2.7 | 105 | ▲2 |
| 2月 | 2.9 | 7.2 | -1.0 | 34 | 135 |
| 平年差 | 2.3 | 2.6 | 2.3 | ▲9 | ▲4 |
| 前年差 | 1.4 | 1.1 | 1.7 | 16 | ▲21 |
| 3月上旬 | 5.5 | 9.1 | 1.6 | 45 | 34 |
| 平年差 | 3.3 | 2.5 | 3.5 | 26 | ▲19 |
| 前年差 | 0.3 | ▲2.3 | 2.6 | 33 | ▲28 |

〔1か月予報〕3月12日発表

・晴れの日が多く気温は、高い確率1週目50%、
2週目80%、3～4週目60%



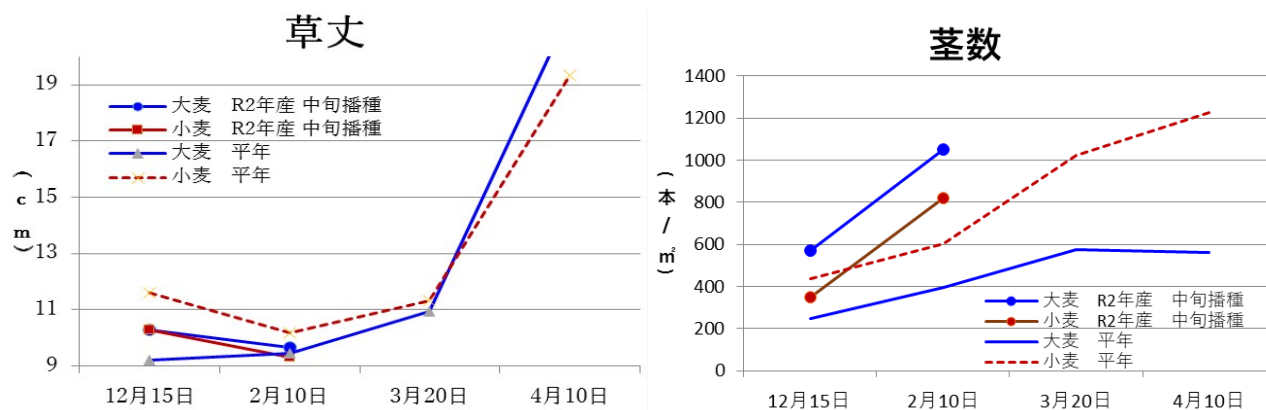
- ・1～3月上旬までの気温は、平年及び前年よりかなり高めに経過した。
- ・平均、最高、最低気温とも平年より2℃～3℃も高く推移した。
- ・降水量は2月が平年より若干少なかったものの、他はやや多雨であった。
- ・日照時間は1月が平年より多照であったが、他はやや寡照となった。
- ・3月中旬まで高温傾向が続いており、一か月予報でもかなりの高温が予想されている。



2 生育状況：12月15日と2月10日頃の生育比較（古試作況試験圃・県内普及センター調査圃）

〔古試：10月17日の中旬播種〕

- ・草丈は、大麦、小麦とも2月10日では平年並～やや低い。
- ・茎数は、暖冬の影響で2月10日現在で、大麦、小麦とも平年よりも多く推移している。
- ・幼穂長では、2月10日現在で、大麦が2.0mm、小麦が0.6mmといずれも平年を上回っている。



〔県内普及センター調査圃：2月10日頃の生育〕

- ・県内はほとんどの圃場で播種期が遅く、大麦、小麦とも草丈は低く、平年の8割程度となっている。
- ・同様に茎数についても、平年の6割から8割にとどまっている。

| 大麦 | 草丈(cm) | 茎数 (本/m ²) | 幼穂長(mm) |
|---------|--------|------------------------|---------|
| 本年 | 7.4 | 420 | 0.4 |
| 前年比(%)差 | 83 | 66 | -1.0 |
| 平年比差 | 76 | 80 | -0.8 |
| 小麦 | 草丈(cm) | 茎数 (本/m ²) | 幼穂長(mm) |
| 本年 | 8.8 | 383 | 0.1 |
| 前年比(%)差 | 112 | 123 | 0.0 |
| 平年比差 | 81 | 60 | -0.1 |

3 今後の管理

(1) 追肥

- ・幼穂形成期の追肥は、有効茎歩合を向上させ、穂数の確保を目的とする。
- ・時期が遅れると追肥の効果が十分に得られないので、幼穂長を確認し、適期に追肥を実施する。
- ・幼穂長2～3mmが目安で、この時期頃から茎立ちし、幼穂や節間の伸長が急激に進む。
- ・この頃の窒素栄養状態の悪化は有効茎歩合低下を招くが、一方で、過剰施用により節間伸長により倒伏の原因となるので、適期・量施用に努める。

| 追肥の種類 (生育ステージ) | | 株直し追肥 (融雪後) | 幼穂形成期 (幼穂長2～3mm) | 減数分裂期 (幼穂長30mm) | 穂揃期 (8～9割が出穂) |
|-------------------|--------------------------|-------------------------|----------------------------|----------------------------|--------------------------|
| 目的 | | 茎数の増加 葉色の回復 | 有効茎歩合増加 (穂数の確保) | 一穂粒数の増加 登熟良化 | 小麦の子実タンパク質 含有率の向上 |
| 大 麦 | 時期 | 2月 | 2月下旬～3月中旬 | 4月下旬 | 硬質麦防止のため 実施しない |
| | シュンライ、ホワイトファイバー ミノリムギ | | 3月上旬～4月上旬 | 4月下旬～5月上旬 | |
| 10a当たり 施用量 | | 窒素成分1～2kg (硫安5～10kg) | 窒素成分2～2.5kg (硫安10～12kg) | 窒素成分2～2.5kg (硫安10～12kg) | |
| 小 麦 | 時期 | 2月 | 3月下旬～4月中旬 | 4月下旬～5月上旬 | 5月中旬 |
| | 10a当たり 施用量 | | 窒素成分1～2kg (硫安5～10kg) | 窒素成分2～2.5kg (硫安10～12kg) | 窒素成分4～5kg (硫安20～25kg) |

(2) 排水対策

- ・停滞水を速やかに排除するため、暗渠が閉まっているか、明渠がきちんと効いているか点検する。
- ・点検の結果、明渠が崩れているなどの場合は、早めに手直し作業を実施する。

(3) 麦踏み

- ・土が湿っている時に麦踏みを行うと、土壌が固く締まり根の伸長阻害や排水性の悪化につながるので、圃場が乾いている時期をみながら実施する。
- ・本年は暖冬で雪がほとんどなかったため、鳥害がでており、葉の黄化や生育量不足の圃場がみられる。
- ・麦踏みの時期と回数目安は、越冬後茎立ち(大麦: 3月上旬頃, 小麦: 3月下旬頃)までに実施する。

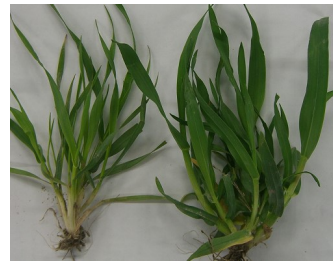
【麦踏みの効果】

耐寒性, 耐旱性の強化・霜柱による被害軽減・徒長, 早立ちの防止・分げつの増加と相互の生育調整
旱害による被害軽減・穂揃いの均一化・鳥害の軽減・深根化 (→鳥害の軽減)・稈の強剛化
風による土壌移動の軽減, 防止

【参考】古試における小麦「シラネコムギ」と大麦「シュンライ」の生育と幼穂発育状況 (3月13日)



10月17日播種
左:小麦(幼穂長1mm) 右:大麦(同3~4mm)



10月30日播種
左:小麦(幼穂長0.5mm) 右:大麦(1~1.5mm)